様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年５月２０日現在

機関番号：１３１０１
研究種目：基盤研究（Ｂ）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０３２０００３
研究課題名（和文）　空間における形の認知を介した「主体」の存立の基底に見る感覚の根源性についての研究
研究課題名（英文）　Research into a basic role of sentiment establishing the function of subject by the recognition of shapes in space

研究代表者
栗原　隆（KURIHARA TAKASHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：３０１７００８８

研究成果の概要（和文）:「主体」は空間の中で、形の認知に感応する中でこそ自覚されるものであって、自我の自己措定のような機序によって成り立つものではないことが確認された。

研究成果の概要（英文）:
We have confirmed that the subject is not constructed as self-foundation of ego, but perceived through its correspondence to recognition of shapes in space.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００８年度	4,200,000	1,260,000	5,460,000
２００９年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
２０１０年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
総　計	13,400,000	4,020,000	17,420,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・哲学・倫理学
キーワード：
共通感覚・身体・主体・空間認知・感応・共通感覚

１．研究開始当初の背景
近世哲学を貫くモリヌー問題、さらにはチェセルデン問題を手がかりに、空間認知から身体感覚が得られることに鑑み、主知主義的な身体理解を超えたところに、雰囲気や気分、共感などの存立機制を明らかにする中で、「主体」観の刷新を図ろうとした。

２．研究の目的
（1）栗原隆（編）『形と空間のなかの私』（東北大学出版会、2008 年 4 月）を共同研究の出発点として、認知科学、建築、美学・美術史の研究者、さらには舞踊家などの研究成果を取り込みながら、「主体」がアトミスティックなものではなく、形の認知を介して空間や雰囲気さらには景色などと感応する中に存立することを明らかにしようとした。
（2）研究を進める中で、「感応」の機序を詳らかにする必要に迫られた。舞踊や宗教儀礼、茶道、絵画、彫刻など、目に見えるものを介して目に見えない美が立ち現れる現象を解明することによって、身体が空間に感応する時に、「世界」が顕現することを明らかにすることを最終的には目指した。

３．研究の方法
（1）当初は、空間認知を通した身体感覚の成立を明らかにしようと、美学者・岩城見一氏、美術史の阿部成樹・山形大学教授らをお招きして、知見を得ながら、認知科学の成果に沿って、モリヌー問題の展開を跡付ける形で研究を進めた。ドイツ観念論の哲学者シ

ュルツエが、実にチェセルデン問題を援用する形で、「主体」を基礎付けつつ、表象の問題を展開したことなどを明らかにした。

(2)「表象」の存立機制を追究するなかで、「感応」という問題が明らかになってからは、建築家・矢萩喜從郎氏、舞踊家・舞踊美学の辻元早苗氏、さらには、リューネブルク大学のクリストフ・ヤメ教授などを新潟にお招きして研究会を開催する中で、哲学の領野を広げながら、自我中心の従来の「主体」観を超える地平に達することを試みた。

それとともに、ヨーロッパでの実地研修を通して絵画空間と世界観との関連について確認できたことによって、「主体」概念が「心」の問題と密接に関係していることに想到するとともに、その「心」が内面的なものでも、個人的なものでもなく、むしろ間主観性の地平においてこそ顕現すると解釈されるところに成り立つものであることを明らかにしようとした。

４．研究成果

一連の共同研究を通して、〈身体〉が、外界に感応し、交流するための器官であって、周囲の環境に感応することを通して、身体こそが、自らの〈身体〉の制約を超える装置であることが、明らかにされることになった。そこに、〈身体〉を中心に自らの方位を定める近代の主知主義を超える方向が示唆されることにもなった。

たとえば、舞踊にあってその身体表現は、その身体そのものを超えようとする営みであり、その〈眼に見える身体〉を超えたところに〈美しさ〉が現出する。〈美〉は、眼前の〈美しいもの〉を媒介としてはいながら、〈眼に見える美しいもの〉を超えたところに現出する。それこそ、カントの言う〈美〉が主観的であることの真意である。〈美〉の受け止め方が、人それぞれによって違うという意味で主観的なのではない。むしろ、〈美〉は、眼前の、美しいとされる客観的なものを超えているからこそ、主観的なのである。

〈眼前のもの〉を超える営みは、視覚のみならず、感覚の協働によって拓かれなければならない。こうした研究を通して、〈景色〉と〈気色〉、〈雰囲気〉と〈気持ち〉、〈身体〉と〈精神〉、〈天気〉と〈気分〉という〈見えるもの〉と〈見えない感覚〉とを、あるいは、〈外〉と〈内〉とを、簡単に分けることなど出来ないことも明らかにされた。もとより、〈内〉と言ったところで、私たちの身体の内部に〈気合い〉や〈気概〉、〈気持ち〉などを探したところで見つかるべくもなく、また〈外〉に〈雰囲気〉を探したところで、確たるものとして〈雰囲気〉があるわけでもない。「空気が読めない」と言ったところで、空気は吸うものでこそあれ、読むものではない。だが、「とげとげしい雰囲気」に「気持ちががさつく」こともあろうし、「麗かな空」に「気持ちも晴れ晴れ」とするのも事実である。

身体こそが、そうした〈内〉と〈外〉とが交差しあっているかのように、空間に感応する媒体であるところに「主体」が開示されるということを、宗教儀礼や芸術作品の美、さらには作法そして良心などの働きを哲学的に解明することを通して明らかにした。三年に亘る共同研究を通して、〈身体〉を媒体として、近代知が陥った、心・身、主・客、自・他、内・外の二元論の制約を超克する形で、統合的な世界観が構築される可能性とその理路を準備することができた、と信じる。

これによって、新たな哲学的人間学の地平に辿り着いたことが見込まれる。

というのは哲学的人間学によって、ある意味では、人間は理性による天上との軛から解放されたと言えたかもしれない。A・ゲーレンの表現を借りるなら、「外なるものは内なるものの『表出』であるという原理」（A・ゲーレン『人間学の探究』紀伊国屋書店、6頁）に則って、表出される内面を探究することが人間学に求められていたからである。

ボルノウがそうした原理として見出したのは、「気分（Stimmung)」であった。この

言葉そのものは、カントにもヘーゲルにも見出されるが、この言葉の照射する領野は広く、またドイツ観念論から、哲学的人間学を結ぶ理路でもある。たとえば、『ニュルンベルク・エンツュクロペディー』でヘーゲルは次のように語っていた。「自然との共感（Sympathie)、いわゆる予見です。現実の中に未来は休らっています。現実とは現実であると同時に、次に生じるものの可能性でもあります。(……）動物が地震を予感するといったような自然を通した普遍的な感応（Stimmung）のことです。むしろ自然と一体になって生きている国民は、自然から引き裂かれてしまっている私たちよりも遥かに強く、自然と連関しているのです」（G.W.F.Hegel:Werke in zwanzig Bänden. Bd.IV,S.48)。この時ヘーゲルは、教養・文化の発達した近代ヨーロッパで人間全体に生じた「疎外」について思いを馳せながら、人間性において生じた分裂とは対比的に、自然との「共感」、そして自然を通した「感応」について語っていると見ることができる。「Stimmung」は、確かに「気分」でもあるが、気分が雰囲気を分け持って成り立つように、外界との「感応」においてこそ成り立つ。

「外なるものは内なるものの『表出』であるという原理」は、眼前に広がる景色に思うものが、内面の気色の反映であることを説明するとともに、春めいた麗らかな日和でさえ、春愁を呼び起こしたりすることに鑑みるなら、内なるものは外なるものに「共感」し、「感応」すると言うこともできよう。

ボルノウの代表的な著作に『気分の本質』がある。「人間の決定的な本質の核心として理性に寄せてきた信頼が崩壊した」（O.F.Bollnow:Das Wesen der Stimmungen. (Vittorio Klostermann)S.33）ことを受けて、「哲学的な眼差しは、必ずやこれまではないがしろにされてきた生のより深い根源に向けられ、その根源から人間の生の内的な構造をすべて見通そうとするようになった」(ibid.)、という。そこで精神生活の基礎としての「気分」の分析が行われたのであった。

ただ、気分と言っても、主観的な想いではない。「気分は、孤絶した人間の『内面的な生』に帰されるべきではなく、人間が風景の全体の中に組み込まれているのであって、風景全体も引き離されて存在しているものではなく、独自のやり方で人間に逆に関係している」（Ebenda.40)。つまり気分は「感応」と捉えられるべきなのである。ボルノウが挙げたのは三つ、「(１)内的世界と外的世界との調和、(２)身体状態と精神状態との調和、(３)心の内部の個々の動きの調和」（Ebenda.39）に「心の感応（Gemütsstimmung)」が成り立つというのである。

『気分の本質』の初版から７０年、拠りどころとしての理性が疑わしくなっていることはもとより、感性の荒びさえ目立つようになってきた今、もう一度、私たちが持っているはずの「共感」と「感応」の機序を照射した、本研究の意義は小さくないものと信じる。

もとより「Stimmung」が「気分」と訳されてしまったために、内と外との「感応」であることが主観性の靄で隠されてしまったきらいがあった。しかし、「気分」を「感応」として捉え直したうえで、その存立によって、すなわち、内官と外官との往還によって支えられているのが「主体」であるということを明らかにできたことは、「心を繋ぐ」とか「心は一つ」と言われもする時代にあって、「心」とは本来、共感の、そして相互主観的な「感応」の虚焦点として想定されたものであって、「主体」とはそれに人格を付与したところに想定されたものであることを、本共同研究を通して明らかにすることができたと信じる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 22 件）

1　城戸淳「カントにおける幸福のパラドックス――幸福主義批判と最高善のあいだ」（日本カント協会『日本カント研究⑪カントと幸福論』理想社、査読あり、2010 年、7～23 頁）
2　座小田豊「ヘーゲル哲学における神の思想――『自由』概念の根本にあるもの」（『フィロソフィア・イワテ』42 号、査読なし、2010 年、37～50 頁）
3　栗原隆「信念と懐疑――ヤコービによるヒュームへの論及とドイツ観念論の成立」（東北大学哲学研究会『思索』
4　栗原隆「意識の事実と観念論の基礎付け」（日本フィヒテ協会『フィヒテ研究』18 号、査読なし、2010 年 23～38 頁）
5　尾崎彰宏「アルベルト・エックハウトの「静物画――オランダ植民地総督ヨーハン・マウリッツの『ユートピア』の表象」（『東北大学文学研究科年報』第 59 巻、査読なし、2010 年、37～65 頁）
6　城戸淳「神の現存在の宇宙論的証明に対するカントの批判について」（新潟大学人文学部『人文科学研究』125 巻、査読なし、2009 年、1～31 頁）
7　山内志朗「中世の論理学」（『理想』9 月号、査読あり、2009 年、136～145 頁）
8　山内志朗「中世哲学と情念論の系譜」（『西洋中世研究』1 号、査読あり、2009 年、75～86 頁）
9　尾崎彰宏「オランダ美術における聖と俗――静物画の勃興をめぐって」（『西洋美術研究』第 15 巻、査読なし、2009 年、84～99 頁）
10　加藤尚武「薬と倫理学」（『薬史学雑誌』Vol.44 No.2、査読なし、2009 年、49～55 頁）
11　加藤尚武「エンゲルハート論文の吟味」（『ヘーゲル論理学研究』第 15 巻、査読なし、2009 年、63～71 頁）
12　加藤尚武「ヘーゲルはどのような哲学者だったのか」（『道の手帖　ヘーゲル入門』査読なし、2009 年 16～32 頁）
13　栗原隆「一言で断言できないヘーゲル」（『道の手帖　ヘーゲル入門』査読なし、2009 年 50～57 頁）
14　加藤尚武「熊沢蕃山と安藤昌益にいま学ぶ」（『環境会議』第 33 巻、2009 年、88～93 頁）
15　加藤尚武「ヘーゲルのホーリズムを真剣に考える」（東北哲学会年報、査読なし、2008 年、81～87 頁）
16　山内志朗「レオ・シュトラウスとイスラム政治思想」（『思想』1014 号、査読有り、2008 年、78～96 頁）
17　山内志朗「ネット社会と〈天使的〉コミュニケーション」（『文学』第 9 巻第 6 号、査読有り、2008 年、74～81 頁）
18　栗原隆「精神と世界――歴史的世界を創建する神話としての超越論的観念論」（『ヘーゲル哲学研究』第 14 巻、査読なし、2008 年、71～85 頁）
19　座小田豊「『自由』の運命としての否定性――『おのれを実現する懐疑主義』」（『ヘーゲル哲学研究』第 14 巻、査読なし、2008 年、66～70 頁）
20　尾崎彰宏「フェルメールのドラマツルギー」（『ユリイカ』No.554、査読なし、2008 年、187～195 頁）
21　尾崎彰宏「ネーデルランドの素描力と古代への挑戦――ホルツィス《ファルネーゼのヘラクレス》」（『線の巨匠たち展』カタログ、東京藝術大学美術館、査読なし、2008 年、33～39 頁）
22　栗原隆「書評：木岡伸夫著『風景の論理――沈黙から語りへ』」（『日本の哲学』第 9 号、査読なし、2008 年、125～133 頁）

〔学会発表〕（計 19 件）

1　城戸淳「学問と理性――啓蒙主義からカントへ、そしてヘーゲル」（日本ヘーゲル学会第 12 回研究大会、2010 年 12 月 25 日、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」）
2　栗原隆「実在と表象――イギリス経験論とドイツ観念論を繋ぐヤコービ」（日本ヘーゲル学会第 12 回研究大会、2010 年 12 月 25 日、新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」）
3　尾崎彰宏「静物画としての自画像」（美術史学会、2011 年 10 月 23 日、損保ジャパン東郷青児美術館）
4　座小田豊「ヘーゲル哲学における神の思想」（岩手哲学会第 40 回大会、2010 年 7 月 19 日、岩手大学人文社会科学部）
5　Takashi KURIHARA：Geist und Welt――Der transzendentale Idealismus als die eine geschichtliche Welt erbauende Mythologie（科研費共同研究の国際シンポジウム、2010 年 3 月 8 日、新潟大学「ときめいと」）
6　栗原隆「意識の事実と観念論の基礎づけ」（日本フィヒテ協会第 25 回大会シンポジウム、2009 年 11 月 22 日、明治大学）
7　城戸淳「カントにおける幸福のパラドクス――幸福主義批判と最高善とのあいだ」（日本カント協会第 34 回学会、2009

年 11 月 21 日、立正大学）
8　加藤尚武「市民運動としてのバイオエシックスと死生学」（日本生命倫理学会、2009 年 11 月 14 日、東洋英和大学（横浜キャンパス））
9　佐藤透「侘びの美意識――その美としての一般性と特殊性」（東北哲学会第 58 回大会、2009 年 10 月 25 日、秋田大学）
10　栗原隆「感覚と懐疑――観念論の基礎づけをめぐって」（東北哲学会第 59 回大会、2009 年 10 月 24 日、新潟大学統合脳研究センター）
11　伊坂青司「道徳教育を考える――家庭・学校・地域社会の現場から」（県高 P 連湘南・鎌倉地区大会、2009 年 10 月 23 日、茅ヶ崎市民文化会館）
12　伊坂青司「ケンペル『日本誌』の〈日本〉表象――精神文化を中心にして」（国際シンポジウム「表象としての〈日本〉」、2009 年 10 月 3 日、神奈川大学横浜キャンパス）
13　加藤尚武「Homo economicus から homo contribuens へ」（東北公益大学シンポジウム「公益とビジネス」、2009 年 6 月 20 日、東北公益大学）
14　栗原隆「三宅剛一とヘーゲル弁証法」（日本ヘーゲル学会第 9 回研究大会、2009 年 6 月 14 日、東北大学）
15　尾崎彰宏「オランダ美術における聖と俗――静物画の勃興」（美学会、2009 年 6 月 6 日、慶應義塾大学）
16　加藤尚武「環境倫理と環境思想」（学術会議、2009 年 5 月 25 日、学術会議）
17　山内志朗「中世哲学と情念論の系譜」（西洋中世学会、2009 年 5 月、東京大学）
18　Hisatake KATO : Verschiedene Motive von Hegels “System” Begriff（日本ヘーゲル学会国際シンポジウム、2009 年 3 月 3 日、駒澤大学）
19　座小田豊「『神を認識する』とはどのようなことか？――ヘーゲル哲学における『神』」（日本シェリング協会、2008 年 10 月 4 日、弘前大学人文学部）

〔図書〕（計 21 件）
1　栗原隆『ドイツ観念論からヘーゲルへ』（未來社、2011 年、281 頁）
2　Takashi KURIHARA : Glauben und Wissen in der Geistesgeschichte (Graduate School of Modern Society and Culture, Niigata University. 2011 年, 171 頁)
3　高知尾仁（編著）、山内志朗（共著）『人と表象』（悠書館、2011 年、423 頁）
4　金森修（編著）、山内志朗（共著）『科学思想史』（勁草書房、2010 年、535 頁）
5　加藤尚武『入門環境倫理学』（御茶の水書房、2010 年、100 頁）
6　栗原隆『現代を生きてゆくための倫理学』（ナカニシヤ出版、2010 年、302 頁）
7　久保陽一（編）、加藤尚武・栗原隆（共著）『ヘーゲル体系の見直し』（理想社、2010 年、272 頁）
8　加藤尚武『未来を守る環境倫理学』（御茶の水書房、2010 年、94 頁）
9　松田純・川村和美・渡辺義嗣（編）、加藤尚武（共著）『薬剤師のモラルジレンマ』（南山堂、2010 年、214 頁）
10　栗原隆（編著）、尾崎彰宏・加藤尚武・伊坂青司・山内志朗・鈴木光太郎（共著）『空間と形に感応する身体』（東北大学出版会、2010 年、389 頁）
11　加藤尚武（共著）『変貌する哲学』（岩波書店、2009 年、293 頁）
12　伊坂青司（共著）『表象としての日本』（御茶の水書房、2009 年、318 頁）
13　栗原隆（編著）『人文学の生まれるところ』（東北大学出版会、2009 年、359 頁）
14　加藤尚武（共著）『徳の教育論』（芙蓉書房出版、2009 年、223 頁）
15　竹内修身（編）、佐藤透（共著）『現代哲学』（金港堂、2008 年 158 頁）
16　尾崎彰宏『レンブラント、フェルメールの時代の女性たち――女性像から読み解くオランダ風俗画の魅力』（小学館、2008 年、263 頁）
17　加藤尚武（共編著）『命題コレクション』（筑摩書房、2008 年、480 頁）
18　加藤尚武『合意形成の倫理学』（丸善、2008 年、240 頁）
19　加藤尚武『「かたち」の哲学』（岩波書店、2008 年、273 頁）
20　加藤尚武『資源クライシス』（丸善、2008 年、216 頁）
21　栗原隆（編著）『形と空間のなかの私』（東北大学出版会、2008 年、335 頁）

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
栗原　隆（KURIHARA TAKASHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：30170088

(2)研究分担者
加藤　尚武（KATO HISATAKE）
鳥取環境大学・大学院環境情報学研究科・教授
研究者番号：10011305

座小田　豊(ZAKOTA YUTAKA)
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：20125579

尾崎　彰宏（OZAKI AKIHIRO）
東北大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：80156174

野家　伸也（NOE SHINYA）
東北工業大学・工学部・教授
研究者番号：80156174

伊坂　青司（ISAKA SEISHI）
神奈川大学・外国語学部・教授
研究者番号：30175195

山内　志朗（YAMAUCHI SHIRO）
慶應義塾大学・文学部・教授
研究者番号：30210321

鈴木　光太郎（SUZUKI KOTARO）
新潟大学・人文社会・教育科学系・教授
研究者番号：40179205

佐藤　透（SATO TORU）
東北大学・大学院・国際文化研究科・教授
研究者番号：60222014

城戸　淳（KIDO ATSUSHI）
新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：90323948

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：